

発達障害児の地域における育児支援に関する研究

—乳幼児期から思春期に至る親のピア・グループサポートの歩みから—

幸 順子・竹澤 大史*

Community Child-Rearing Support for Children with Developmental Disorders — Process of Peer Group Support for Parents of Children Moving into Adolescence —

Junko YUKI and Taishi TAKEZAWA

1. 問題

障害児の保護者支援に関して、わが国では1970年代以降、障害受容や保護者の育児ストレスをめぐって研究が行われてきた。特に発達障害児に関しては、子どもの理解しにくさによる養育困難の問題が自閉症児親の会などを中心に指摘され、支援が要請されてきた。2005（平成17）年、発達障害者支援法の施行に伴い、「早期支援」・「家族支援」が明確に位置づけられ、保護者や周囲の子ども理解の促進、家族のメンタルヘルスと二次的障害（虐待・いじめ）の防止などの観点から、医療、保健、心理、教育、福祉の各領域において保護者支援の問題が取り上げられるようになった。

現在、保護者支援の一つとして、親を「共同治療者」として位置づけるペアレント・トレーニングなどの取り組みが行われている（上林他，2009）¹⁾。スキルを専門家から学び、育児上の問題を改善しようというこうしたいわば医療モデルの育児支援とは別に、当事者である保護者同士が生活の中で子育てを学び合い支え合う仕組みを作るといった生活モデルの育児支援の必要性を主張する意見もある。

村田（2007）²⁾ は早期支援の課題として「地域での通常の子育て支援の中から保護者自身が気づき、発達障害の子ども理解に緩やかに移行できるような配慮」や「同じような悩みを持つ保護者グループによるピアカウンセリング」等、保護者主体の環境設定の必要性を指摘している。また、小淵（2009）³⁾ は「養育者の心情への共感」と「相互的なピアサポート」の重要性を指摘し、宋ほか（2004）⁴⁾ は、保護者への調査から「親同士の懇談」・「情報交換」・「勇気づけとストレス発散の場」としての「親の会」の重要性を示した。また幸（2008）⁵⁾ は、「保護者が日常生活の関係の中で支えられる力をつけることとそうした環境（関係）を育むことが重要」であることを指摘している。現在、厚生労働省が推進するペアレント・メンター養成もそうした発想を基盤にした支援の一形態である（井上2011）⁶⁾。こうした保護者による相互支援をいかに地域に根付く主体的・継続的なものに発展させるかが今後の課題である。

* 和歌山大学教育学部

2. 目的

筆者らは、2002 (平成14) 年、K市の事業として始まった児童館主催の「子育て教室」(子どもの育ちと子育てに不安を抱える乳幼児の親子を支援するための保護者の相互支援グループ)の活動に2003 (平成15) 年より支援スタッフとして参加してきた。その実践研究の一部は既に報告した。(幸・竹澤, 2011)⁷⁾(竹澤・幸, 2011a)⁸⁾(竹澤・幸, 2011b)⁹⁾本研究では、2003 (平成15) 年～2010 (平成22) 年までを一区切りとし、実践の経緯と活動内容をまとめ、地域における発達障害児の保護者による相互支援の成果について検討することを目的とする。

3. 方法

(1) 「子育て教室」開設の経緯

① 開設時の状況

平成10年頃から、1歳6か月児健康診査後のフォローアップ教室に発語の遅れだけでなく、発達障害を疑われる子どもが増加してきた。県の児童相談所心理判定員の巡回相談により、子どもの育ちと子育てに不安や困難を抱える保護者同士の悩み・接し方の話合いの必要性が上げられ、K市の一事業として開設となる。

② 開設時期

2002 (平成14) 年度から実施。運営主体はK市。

③ 開設目的

少子化や核家族などの家庭環境の変化により、子育てに不安や孤独感をもつ親が増えている。そのような中で、自閉傾向・多動・発語遅れ等の困難を抱えている子どもの親同士の交流と育児不安の軽減を目的として、教室を開催する。

(2) 「子育て教室」の内容

① 参加者

開設時は、おおむね1歳～6歳の、子どもの育ちと子育てに不安を抱える乳幼児の親(主に母親)子である。対象児のきょうだいを同伴の場合もある。後に学齢期の子どもの保護者参加もあり。1回の参加者は、おおむね5～15組程度。自由参加。現在の来所経路は、保護者同士の口コミと支援館来館者からの参加が主である。子どもが就園後は保護者のみ参加する場合もあり。2003年時の参加者の子ども(対象児)の年齢範囲は2～5歳である。

② 開催場所

- ・K市健康管理センター(2009年まで)
- ・K市子育て子育て総合支援館(2010年以降)

③ 教室の開催方法:

- ・自由参加(保健師、保育士、母親からの紹介)
- ・年間8～11回(およそ月1回)
- ・午前10時～12時
- ・保護者、スタッフが車座になり、子育ての悩みや工夫、子どもの成長などを話し合い、保護

者同士で育児を学び合う。

③ 支援スタッフについて

- ・保育士 2名
- ・保健師 1名 (2009年まで)
- ・心理 (ボランティア) スタッフ (臨床心理士・臨床発達心理士) 2名
- ・ピア (母親ボランティア)・スタッフ 1名～ (2011年より)
- ・託児ボランティア 1～3名程

④ 「子育て教室」のプログラムについて (表1、表2)

就園・就学後の保護者のみの参加者が増加したことにより、2006年頃より状況に応じて、「体操・親子のふれあい遊び」などの子ども向けプログラムを省略した「親グループ学習会」のみのプログラムに変化した。

表1 開設当初のプログラム (2002年4月～2006年10月頃まで)

9:30～	受付・挨拶 (名札、シール貼り)・自由遊び
10:00～	体操・親子のふれあい遊び
10:20～	休憩タイム (トイレ、おやつ)
10:30～	親グループ学習会 (親同士で子育ての学び合い) /子どもの自由遊び (託児ボランティアによる支援)
11:30～	終わりの会・さようならの挨拶
11:40～	スタッフミーティング (スタッフとボランティアスタッフで各参加者の課題を振り返る)

表2 現在のプログラム (2006年11月頃～)

9:30～	受付・挨拶 (名札)・自由遊び
10:00～	親グループ学習会 (親同士で子育ての学び合い) /子どもの自由遊び (託児ボランティアによる支援)
11:50～	スタッフミーティング (スタッフとボランティアスタッフで各参加者の課題を振り返る)

⑤ 親グループ (仲間による相互支援) の進め方について

支援のあり方としては、開始当初から、親主体の相互支援関係が地域において成熟することをねらいとした。専門家スタッフ (保育士・臨床心理士・臨床発達心理士) は司会進行を行うと共に、相互支援のファシリテーターとして、経験に基づいた母親同士の具体的な意見交換を促し、相互支援関係の支援に努めてきた。例えば、「どうしたらいいか」というような育児の方法論については、基本的には参加者やピア・スタッフの経験に基づいた発言を促し、参加者同士が子どもについての理解や子育てを互いに学び合い、その親なりの育児を行うようになることを目標とした。

⑥ 会の記録と振り返りについて

毎回、参加スタッフ、参加者、開催時間、グループの話し合いの内容について、筆記により記録した。特に親グループの話し合いの内容については、逐語的に詳細を記録している。さらに、終了後、スタッフによる会 (特にグループの話し合い) の振り返りを行い、発言内容をも

とに参加者および子どもの成長発達の様子や困難、今後の課題を確認し合っている。

4. 結果

グループの参加者の話し合いとスタッフによる振り返りの記録を元にこれまでの実践の経過についてまとめると以下ようになる。

(1) 参加人数などの推移 (2002年～2010年まで) (図1)

2005年に向かっての参加人数の落ち込みは、他の早期支援の事業の充実と関連性がある可能性がある。また、その後の参加人数の増加は、子どもの就園・就学後も参加を続ける保護者が増加したためと思われる。

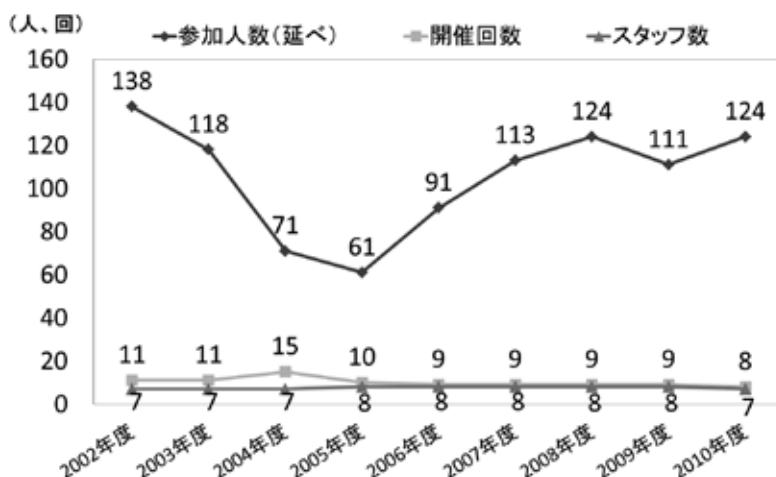


図1 参加人数などの推移

(2) 「子育て教室」親グループの経過と展開

2002年～2010年までの親グループの経過の特徴をまとめると、以下ようになる。

2006年頃から次第に、子どもが就園・就学後の参加者が増加し、「子育て教室」のプログラムは親グループの学習会(話し合い)のみとなる。年少の子どもを持つ親の悩みや発言に対し、より年長の子どもを持つ親が自己の経験を自発的に話す場面も増加するようになる。そうした親グループの成長を経て、2010年には、「子育て教室」のメンバーによって、学齢期以降の子どもと親の交流を目的とした自主サークルが設立される。これ以降、主に乳幼児対象の「子育て教室」と並行して、主に学齢期以上の子と親を対象とした「自主サークル」のメンバーの運営による「母の会」(学齢期以降の子どもを持つ親によるピア・グループサポート)が開催されるようになる。翌年からは、「子育て教室」と「母の会」は別日程で開催されるようになり、「母の会」のメンバーによる「子育て教室」への参加支援も行われるようになる。

① 2002 (平成14) 年開始当初～

- ・就園前の子育ての難しい子どもや、ダウン症、脳性まひ、広汎性発達障害(自閉症スペクトラム)児などの子どもと保護者の参加

② 2003 (平成15) 年～

- ・就園後の継続参加者の増加
- ・親同士の相互支援の展開 (養育の工夫、親の心情への共感)

③ 2006年 (平成18) 頃～

- ・広汎性発達障害 (自閉症スペクトラム)、就園後の子どもと親の増加
- ・親グループを中心としたプログラムへの変化
(子どもの参加割合が減り、年長児の親から年少児の親への相互支援関係と、親同士の交流が活発になる)
- ・就学後の継続参加者からの育児支援 (養育の工夫、親の心情への共感)
- ・育児に関する情報の提供 (就学・就園に際しての備えなど)

④ 2007 (平成19) ～

- ・子へのイライラなど否定的感情、親戚や隣人へのカミングアウトなど、話題が多岐にわたるようになる。

⑤ 2009 (平成21) 年～

- ・教室の過去・現在の参加者を対象としたニーズ調査を実施

⑥ 2010 (平成22) 年～

- ・引き続き乳幼児の「子育て教室」を開催
- ・支援館職員から参加者への出席確認の電話がけを修了
- ・学童の子と親の交流を目的とした自主サークルの設立を専門家スタッフが支援
- ・親子自主サークル (学齢期以降の親子が対象) 設立・運営
- ・自主サークルの「母の会」と「子育て教室」の合同開催

⑦ 2011 (平成23) ～

- ・母親自主サークル (親子の交流を目的とする) の「母の会」独立 (2017年現在会員数24名) と子育て教室参加者への紹介
- ・「子育て教室」へのサークルメンバー出張支援・連携

(3) 親グループにおける話し合いの内容

各回における話し合いの内容について、項目にまとめると以下の通りである。

- ・子どもの近況 (家庭での生活、園・学校での生活の様子)
- ・子どもの特徴等の理解について
- ・子どもの問題行動、疑問や心配、気になること (興味関心、食の偏り、こだわり、好き嫌い、性格、ゲームへの熱中など)
- ・子どもの成長発達 (言葉・認知発達・対人関係・運動・生活習慣の発達、つまづき、性の問題)
- ・親子関係 (遅れて出現した甘え、思春期の反抗など)、子どもとのかかわり、問題行動等への対応
- ・育児をめぐる母のストレス (子どもへのイライラ、夫との意見の違いなど)
- ・園・学校・地域との関係: 保育者・教師との関係 (子どもの理解の有無)、親同士・近隣との関係 (子どもの理解の有無、子どもの障害や特性をどのように伝えるか)
- ・園・学校・地域での様子や心配事: 子どもの友達関係 (いじめの対象・友だちができない、暴力・痴癪)、算数・作文・体育などの学業不振、学校での行動の問題、学校嫌い、不登校・登園しぶり)

- ・家族のこと (夫、子のきょうだい関係、きょうだいの問題、舅姑との関係)
- ・自分のこと (子どもの障害受容、子ども観・養育観・人間観について)
- ・親類や隣人等への障害のカミングアウトの是非 (子どもの自我発達に伴う)
- ・本人への障害の告知の是非 (子どもの自我発達に伴う)
- ・就園・就学の進め方について (園や学校選び、障害について告げるかどうか、普通学級か支援学級か支援校かの選択)
- ・サポートブックについて (必要性、作り方、作って良かったこと)
- ・育児支援 (デイサービスなど) の情報交換
- ・病院、相談機関 (診察、発達検査・知能検査などのこと、障害手帳の発行について)

(4) スタッフの果たした役割

各回を通したスタッフの役割について、項目にまとめると以下のような内容になる。

① ピア・スタッフの役割

- ・親の立場の経験を活かして、自らの経験を話す。
- ・親の立場の経験を活かして、親を (共感的に) 理解する。
- ・親の立場の経験を活かして、具体的に意見・助言する。
- ・育児情報交換のきっかけ作り (情報提供)
- ・リーダーシップを発揮して、地域での交流のきっかけを作る。

② 専門家スタッフの役割

- ・すべての親が安心して発言できる雰囲気作り心がける。(カウンセリングの3つの態度条件: 自己一致、受容、共感的理解に基づいた関わりをする。)
- ・親同士の相互支援をファシリテートする。
- ・保護者自身の主体者としての変容を支援する。(親のエンパワメント)
- ・各専門の立場から発言する。

保育士: 保育場面での子どもの具体的姿、保育で保育者が大切にしていること、子ども同士の関係について、集団の中での子どもの成長について

心理の専門家: 心や行動の成長発達の道筋や意味について

- ・他の社会的資源の情報提供をする。
- ・会の運営・継続に際して反省的実践者として機能する。
- ・教育・福祉の人間観 (子ども観・養育観・教育観) に向けた態度を持つ。

その他、グループ全体で一つ一つの話題を共有し、一人一人の保護者が自らと子どもについて話すだけでなく、他の保護者の疑問や不安・喜びに耳を傾け、自らの意見や考え心情などを少しでも発言できるように配慮し、また、グループ外での地域での保護者同士の交流が広がるよう支えている。

5. 考 察

(1) 親グループの対話の内容について

常に、様々なテーマが対話の中で話されるが、特に、就学問題 (学校、学級選び)、障害手帳の発行、子どもの自我発達と関わる障害のカミングアウトや本人への障害の告知の問題は、

子どもの成長に伴い必ず繰り返し話題となるテーマである。いじめ問題、反抗期、ゲームへの熱中、性の問題なども年齢が上がるにつれ度々話題に上る。

このような話題は、親の子ども観・養育観・教育観が反映される話題であるが、様々に異なる意見も含むグループで話し合う意義は大きいと思われる。親同士の率直な対話を通して、ありのままの子どもを理解し今の子どもに信頼を置く養育観や養育態度へと変化する様子が見えてきた。

(2) ピア・スタッフを含むピア・グループサポート（仲間による相互支援）の意義と成果

発達障害児の育児支援は、家族のメンタルヘルスや二次的障害のリスク防止の発想を土台として、早期の子ども理解と特性に応じた育児方法のコツを学ぶことを目的にしているものが多いと思われる。そうした支援は必要な場合もあるが、一方で、その最初の短い時期が過ぎた後には、何が得られたか以上に、日々新たに生まれる育児の悩みを相互に支え合う関係が日常的に継続し続けることが、むしろ保護者を励ますものとなったりする。

上記のような考えに基づき、当事者主体の相互支援関係が地域において成熟することをねらいとし、スタッフは支持的受容的支援を行うと共に相互支援のファシリテーターとしての役割を取り、相互支援関係が成熟するよう努めてきた。そのような中で、母親たちが親としての自信（子どもや自分自身への気づき・肯定感）を得るだけでなく、他の新たな仲間に対しても、身近な育児の先輩として支援者の役割を主体的に担い、子育て仲間として相互に交流する関係を形成させた。さらに、自主サークルを結成・運営し、地域において、子どもを育む環境の改善を目指す支援の主体者グループとしても機能するに至った。

このグループの中で当事者の母親が語った言葉は非常にシンプルだが説得力のあるものである。例えば、「今できるようになったことを認めて、周りとは比べないで。」「必ず伸びる、先を見ないで今を大切に。」「子どもにも自分にもハードルを上げすぎないで、気楽に。」「先生を敵に回さずうまくやる、ありがとうの気持ち。」「イライラして虐待しそうになるので辛いのがよくわかります。」これらは、同じ立場の母親からの心からの発言であるだけに、受け手に響き、そうした言葉を投げかける存在に励まされ、「自分たちもやっていると」思える勇気を与えるように思われる。

ピア・グループサポート（仲間による相互支援）によって育まれるもの、すなわち成果は以下のようにまとめられるだろう。

- ・仲間の様々な異なる意見を知ることで、保護者の子ども理解や自己への気づきが深められる。
- ・仲間の経験を聴くことで、これから自分や子どもが進む先の姿を想像できたり、視野を広げたりできる。
- ・グループ全体で話題を共有し、自己の発言に対する他者からの反応を得ることで、保護者の自己理解と安心感・自信（自己肯定感）が育まれる。
- ・仲間に話をして理解されることで、安心感を持った一人ではないと勇気づけられたりする。
- ・自分の経験を話すことが相手にとって役立つことを知ることで、自信につながる。
- ・サポートする側にもされる側にもなれる関係が築かれる。
- ・グループでの対話により保護者の他者理解が促進され人間関係の力が育まれる。（相互支援、社会性の成長）
- ・保護者が環境に働きかける主体者に成長する。（親と子の交流と相互援助を目指す自主サー

クルが母親によって設立・運営されるに至った。)・発達障害児が地域の中で育っていける環境をつくる。

ピア・グループサポートは、子どもと同様の課題を持つ保護者にとっても効力を発揮し得る。子育てを学び合い、安心と共感と協力を育むだけでなく、保護者が主体者として自ら環境に働きかけ地域を変革して行く存在になることをも可能にすることが、この実践経過から示されたように思われる。

(2) 今後の課題について

育児におけるピア・サポート(仲間関係による相互支援)の実践は、一般乳幼児の地域子育て支援において広まりつつあるようである。しかし、就園・就学後も支援を必要とする発達障害児の、「親からの心理的自立」(高橋, 2009)¹⁰⁾という新たな課題を迎える学童期・思春期以降を見通した持続的で主体的なピア・グループサポートの実践と研究の蓄積はこれからである。

継続することで、その時期ごとの課題に沿った対話が可能となる。例えば、就学問題は、子どもにとってのみならず、親にとっても人生の大きな選択となる重要な出来事である。「周りの子供がみんな喜びに満ちて入学式を迎えるのに、私は、心配と不安の方が先立って、入学式なのに嬉しい気持ちになどなれなかった」と話した母親があったが、そうした発言も含め経験者の体験を聞き共有し、いざとなれば身近に相談できる頼れる仲間がいるというというだけでも、どれほどの安心感が得られるだろうか。

ライフサイクルを通じた家族の支援を当たり前のものとして、地域に根づかせ継続させるための条件を検討することが次の課題になる。

6. 要約

発達障害児の親同士が、地域において育児を学び合い支え合うことを目的として支援を行ってきたところ、親グループに変化が生じ、相互に支え合う関係が築かれ、新たに自主的な親グループが形成されるに至った。今後の課題としては、地域における親同士の相互支援(ピア・グループサポート)の取り組みをいかにして地域に根付かせるかを検討することである。

Abstract

We have been supporting parents of the children with developmental disorders so that the parents can learn about child-rearing from the community members. The group of parents has grown to support each other and has also made a new voluntary group of parents independently.

Further studies are needed in order to have parental peer group support take root in the community.

7. 謝 辞

研究としてまとめるにあたりご協力くださいました「子育て教室」、「自主サークル」の参加者及びスタッフの皆様、心よりお礼申し上げます。

本研究は、JSPS（平成25～27年度日本学術振興会）科研費JP25381334（研究代表者：幸順子）、JSPS（平成28～30年度日本学術振興会）科研費JP16K04857（研究代表者：幸順子）の助成を受けた研究の一部です。

8. 文 献

- 1) 上林靖子監修, 北道子・河内美恵・藤井和子編集, こうすればうまくいく発達障害のペアレント・トレーニング実践マニュアル, 中央法規2009
- 2) 村田昌俊, 教師として保護者として発達障害の理解を深める, 臨床心理学7 (3), pp.339-343, (2007)
- 3) 小淵隆司, 「家族を支援する」とは、何を支援するのか—地域子育て支援機関における支援の実際, 障害者問題研究第37巻第1号, pp.61-67, (2009)
- 4) 宋 慧珍・伊藤良子・渡邊裕子, 高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと親の支援ニーズに関する調査研究, 東京学芸大学紀要1部門55, pp.325-333, (2004)
- 5) 幸 順子, 個性を生かした相互援助, こども環境学研究第4巻第1号, p.41 (2008)
- 6) 井上雅彦・吉川徹・日詰正文・加藤香, ペアレント・メンター入門講座: 発達障害の子どもを持つ親が行う親支援, 学苑社, (2011)
- 7) 幸 順子・竹澤大史, 春日井市における発達障害児の家族への育児支援1: 「子育て教室」の立ち上げと活動内容, 第22回日本発達心理学会大会論文集, p.415, (2011)
- 8) 竹澤大史・幸 順子, 春日井市における発達障害児の家族への育児支援2: アンケートによるニーズ調査, 第22回日本発達心理学会大会論文集, p.416, (2011a)
- 9) 竹澤大史・幸 順子, K市における発達障害児の母親への育児支援—参加者のニーズ調査—, 名古屋女子大学紀要第57号 (人文・社会編), pp.379-386, (2011b)
- 10) 高橋和子, 思春期・青年期の発達障害をめぐる社会生活支援の現状と課題, 臨床発達心理学研究, 4, pp.34-43, (2009)

